メーヌ・ドゥ・ビラン

實踐的感覺主義より理論的感覺主義へ

錦田義富

一

メーヌ・ドゥ・ビランは千七百六十六年十一月二十九日西南佛蘭西ドルドーヌ縣ベルズラークに生れた。家柄は貴族ではあつたが、所有財産も少く、人の美望嫉視の的となる程でも無かつた。父は醫を業とし、其術の秀れたので地方に多少名を知られて居た。餘り壯健でも無かつたらしい兩親の遺傳を受けて、體格は纖弱、感受性は鋭敏。或は今謂ふ腺病質の生れつきででもあつたらうかと想はれる節がある。野に川に蝶を追ひ魚を漁り餓鬼大將となつて嬉戯するやうのこともなく、引込み勝ちな内氣な幼年時代を過したらしい。

家庭教育を濟ましてからペリゴーに送られ、其處でカトリック僧侶の手から一般學術及宗教の教育を受けた。學業は可なり優等の方で、就中數學には秀れたと傳へら

れて居る。然し宗教々育の方は何等の道德的感化をも此多感の少年には與へなかつたらしい。之れは一般に宗教の權威が地に墮ちて居た爲めもあつたであらうし、又教へる人に深い信念も高い人格も具へなかつたせいもあつたことであらう。然し幼い頃から既に內觀冥想の傾向著しく、己れの存在に驚異し、我が生存の意義を本能的に內省したことも稀れではなかつたと告白して居る程の彼であるから、當時の僧侶達の教へて居た樣な煩瑣な信條や空虛な教理に傾聽感動すべく餘りに早熟且つ聰明であつた爲めと云ふ點に其重なる源因があつたのでは、無かつたかと想像される。一通りの教育課程を終へてから、近衞士官になつて居た或從兄弟の勸めに從ひ、靑雲に攀づる第一階を先づ軍人より初むべく都に上つたのが十九歲の時であつた。翌千七百八十五年望み通り近衞兵となつた。

Maine de Biran と云ふ名は生時の名ではない。彼が本名は François-Pierre Gonthier de Biran と云ふのである。Maine と云ふ名は何時如何なる理由に基いて用ゐらるゝに至つたか其邊の事情は明瞭を缺いて居る。千七百八十七年二月二十六日日附の、彼が官邊へ差出した或願書に此名が署してある處から、兎も角夫れ以前より此名の用ゐられたることだけは判明する。Naville 氏の推測によれば、之は彼が幼時洗禮の際附せらるゝ名に添加せられたる unprénom de fantaisie であつたらうとのことであるが、Couailhac 氏は之れと異り、世襲の不動產

にLe Maineと云ふ地名なのがある、夫れをばもつと遅い時期に取つて用ゐるやうになつたのであらうと想像して居る。要するに何れも臆測に止まり、其因緣に至つては今尙不明と云はねばならぬ。

二

横暴なる專制、苛酷なる課稅、不條理なる束縛を以つて、十五萬の王侯僧侶に奴隷的奉仕を强要されつゝあつた二千五百萬の民衆は、何時迄かよく塗炭の苦みを續けることが出來やう。怨嗟呪詛の聲は野に山に轟いて居た。山雨來らんとして風は樓に滿ちて居た。眼あるものは視たであらう。耳あるものは聽いたであらう。然し優柔不斷のルイ十六世、驕奢放縱のマリー・アントアネットを中心として之を取卷く都の貴族僧侶縉紳學者達には世は永しなへの春であつた。皇后の尊を以つて市井の群集に伍し野卑なる觀物に打ち興ずるのみならず、更に進んでは自づから道化芝居の役者に扮して觀衆の喝采に得々の色を見せ、私室にて娼婦にまがふ服裝をなすのみか、其愛人の數が交際界の姦しき話題に供せられたる程にも王室の威嚴を失墜しながら、流石に尙ほ百六十萬フランの頸飾を苞苴として大臣の地位を購はんとする僧侶を出せし程度の尊敬は剩して居た。チュルゴー、ネッケルの後を襲ふた凡オカロン

ヌが國債政策によつて辛じて一時を彌縫せし程の窮迫を告げながら、ヴェルサイユの宮殿、巴里のサロンに饗宴歌舞の聲影を絶たなかつた程の誇りと奢りは保たれて居た。草深い片田舎から出て來たばかりの二十歳の青年士官メーヌ・ドゥ・ビランの這入つて行つたのは、正に斯うした廢頽的享樂の雰圍氣であつた。意馬心猿の刹那の狂ひに百年の生命を拋ちて悔ゆるを知らぬ青春の血潮を漲らして居た彼は其環境に順應するに何の躊躇もしなかつた。而して彼は直ちにサロン生活の成功者となつた。

すらりと高い脊、花車な容貌、碧い眼ざし、透き通るばかりの青白き皮膚――之れ彼が心窃に誇りとし尊重するに吝かならざりし天與の風姿であつた。交際するに當り我意を押通すことなく常に對者の位置に身を置きて之と交感融和せんとする態度、冷淡無頓着の眼を以つて遇せらるゝことに堪え難き苦痛を覺え只管に人の溫情好愛にすがらんとする傾向、惡しと知りつゝ人の勸めは否み難く意を迎へ氣を損ぜぬ應對振り――之れが努力や打算の念の結果に非で彼の蒲柳の體質懇篤なる天性よりする自然の發露であつた。加ふるに音樂に對する豐かなる趣味と秀れし技能とをさへ備へて居た。彼れが當年の風流才子としてサロン生活に成功を贏ち得たるに何の不思議があらう。後年精神界の人となつての最初の感想錄に『世の快樂と

よぶ程のものは剩さず味ひ盡した』Ce que le monde nomme plaisir, je l'ai goûté dans toute son étendue と云へるを以つて、當時の生活の程は推知することが出來るであらう。ブルボン王家が長く其權威を維持して居たならば、彼の一生は一箇のドリアン・グレーとして始終したかも知れなかつた。「さはれディオニソスの神も長くは彼を祝福しなかつた。運命の秤は轉位した。

貴族は血を以つて、僧侶は祈禱を以つて、而して第三階級は財産を以つて租稅を拂ふべきものと久しき間考へられ又信ぜられて來た。然し血稅を拂ふもの獨り貴族のみに限らず、祈禱は名のみとなれる今も猶、第三階級のみ獨り負擔する處のもの(種類に於ても分量に於ても)年々歲々多きを加へ來ては、彼等とて何時かは清算を强請せずして已むまい。千七百八十九年は卽ち其時期であつた。『朕は國家なり』L'Etat, c'est moi. に對して『我等こそ國家なれ』L'Etat, c'est nous と稱へた人 Abbé Sieyès の出た時に既に千七百九十三年一月二十一日の斷頭臺は豫告されてあつた。ネッケルを再び起たしめても、百七十五年目の三族會議を召集しても機は既に遲かつた。七月十三日のサン・ラサル寺の掠奪、十四日バスチーユの破獄は革命の第一聲であつた。護國軍の三色旗脚下に蹂躪せられ饗宴ヴェルサイユに闌なりとの報知に亂髮徒跣餓虎に

も似たる暴民婦女四萬餘人王宮に殺到したる十月三日を以つて、有史以來の血腥き大革命の面目は鮮かに顯はれて來た。日頃殊遇を忝くしたる近衛兵はよし太刀拔くすべは知らずとも、はた喊聲の前に怖えながらも、しかすがに一應の對戰は試みねばならぬ。メーヌ・ドゥ・ビランは此時正面防禦の任に當り可なり惡戰苦鬪したと見え、其馬は斃れ其腕には銃丸の擦過傷を受け危く兇刃に生命を奪はれやうとさへした。ラファイエットの救解に辛くも暴動抑制され、國王チウレリー王宮に幽囚の身となると共に、近衛兵は解散され、ドゥ・ビランも其職を失つた。されども彼は猶功名に執着は斷たなかつた。軍隊の機關技師となる目的を以つて數學を勉强した。之れが後年の哲學研究に有力なる援助を與ふるに至らうとは神ならぬ身の誰が知らう。

カバニー(觀念學派の一首領)の手を盡くした治療の甲斐も無く比較的溫健着實であつたミラボーの死するや立憲王政の望みは影薄くなつた。フヱヤン黨は漸次勢力を失墜し、世はジロンド、ジャコバン二黨の共和の天下へと移り行く形勢を示した。凡ての「時間的」「歷史的」を破棄することによつて、理想たる「自然」へ復歸せんとする革命運動は日一日と過激となつた。貴族出身にして併も近衛士官たりしメーヌ・ドゥ・ビランの閱歷は到底彼をして公生活の人たることを容するものではない。彼は當初の

計畫を抛つの餘儀なきを悟つた。斯くして彼は二十五歳の時、早くも青雲に攀づべき梯を摧かれ、孤影悄然進まぬ足を故山に運ばねばならなかつた。

三

巴里滯留中父先づ歿し母之に次ぎ二人の兄弟も亦相次で此世を去つた。故郷ベルズラークを距る一里半餘母方の遺産たるグラートルーに彼を迎へて吳れた親味の人とては愛妹マリー・ヴィクトアール一人であつた。併も彼女さへ長くは此世の人でなかつた。名に憧れ戀を漁さる都の享樂生活には、哀愁を紛らし沈思を遮る術にことは缺かなかつたでもあらう。浮世の榮達に斷念を餘儀なくされ死屍に似たる身を故園に横へた彼、賴るべき骨肉の親を一人殘さず失ひまこと其形影相弔ふ身の上となりし彼、物に感じ事に動き易く人一倍人懷かしがる彼、そもや何によつて此失意を慰め此哀傷を忘じ此空虛を充さんとはする。働かねばならぬ業とてもなく語るに足る友をも持たざりし此青年貴族は「狂へる如く」avec une sorte de fureur 書籍に走つた。而して當初は何の問題も持たず中心點も定めず、唯手當り次第に亂讀した、寸暇をも惜んで耽讀した。

さはれ功名の念は掃ふこと難く煩惱の執着は斷じ難い。强いられたる隱棲、已むなき孤獨の今の身には、想ひ出は歡樂の杯の味を更に濃厚にする。斯くして彼は文筆の士として立ち、せめても世の忘却今の倦怠を脱しやうと謀つた。世に歌はれん爲めには博覽多識であらねばならぬ。淺くとも廣く、衷心の要求は差し措いても他に誇示するの覺知を必要とする。かくて脆弱の身體、沮喪せる意氣に强いても鞭韃叱責を加へ、焦心焦慮に可なりの長い月日を費やした樣である。彼は當年を回顧して『物識りにならうとの願が永く私を苦めた。凡ての事を一度に知らうとの慾が、私自身には何の繋がりもない澤山な種類の研究に私を引きつけた。私に適する部分(卽ち哲學及倫理)に集注したならば有利に使用し得たであらう時間をば如何に多く空費したことよ』と嘆じた。主として讀んだのは、古典にてはソクラテース、セネカ、シセロ、下つてモンテーヌ、フェネロン、パスカル、近き處にてはコンディヤック、ルーソー等である。就中ソクラテースの崇高なる人格とコンディヤックの明快なる理論とには最も心を動かされた樣である。尙又數學をも研究した。彼は之に依つて大に思考法を練磨することの出たのを感謝しては居るが、『算數に向いた頭も持たないし且又此研究の要求する極度の緊張の堪ゆるには餘りに弱き健康』であつたので繼續しな

かつたと告げて居る。

四

幼時既に己が生存の意義に驚異の眼をみはつた程の彼が斯うした幻影に何時迄も瞞らかされ續けるであらうか。彼は何時の間にか亂讀から潛思に轉じた、他より我に歸つた、外より內に向つた。彼自づからの言葉を借りて云へば、『放縱から哲學へ飛躍』した。un saut de la frivolité à la philosophie『思想內に幸なる革命』を遂げた une revolution heureuse dans mes idees。此回心の時期は果して何時頃であつたか、的確には定め難い。兎も角千七百九十四年五月二十七日日附の、我等に殘されたる彼の最初の感想錄に於て、彼の一生の問題と解決の方針とが初めて明白に認識せられるのであるから、此時期を以つて哲學者としての彼れが生涯の誕生日と見做してよいであらう。

彼が回心の過程に至つては、事心胸底裡の機微に屬し、餘人の窺知を許さざるものがある。惟ふに彼の如く情火の外に灼熱するよりは寧ろ溯源求心を本來の面目とする人にあつては內觀省察の生活に入ることが彼の內面的必然であつたのであらう。私はたゝ彼をして本然の彼たらしむるに協力した機緣を討ねて聊か彼が回心

の道行を髣髴するよすがにしたいと思ふ。

彼が日常起臥するグラートルーの住居は森と草場とに蔽はれ麓に流洌なる小川を纏はしたる小高き丘の頂近くに位する一軒家であつた。見渡す限り高低參差たる農作地、――有名なる酒の本場に程遠からぬこのあたりのとなれば取わけ小麥や葡萄の栽培が盛であつたことであらう。天そゝり立つ森林――そこには四季朝夕の氣象の推移色彩の變化が飽かぬ眺めを呈したことであらう。アルプスの崇高雄大は無いが人を魅する靜かな美には富んで居た。自然の永はの威嚴と人間の平和なる勞作とは遺憾なく呈示されてあつた。外運命の神に見離され內骨肉の親に死別し眞に孤影茕然たる彼を容れたる住居と其周圍とは斯くの如きものであつた。「自然は笑ひ人は泣く」とユーゴーが歌つた心持を此時初めてしみじみと味得したとであつたらう。物の哀れは中々に秋にも優る晩春の夕暮、そことも知らず足の向ふがまゝに委せての逍遙に此世ならぬ樂しき思ひ果てしもなく湧き來り我にもあらず涙ぐまる、あはれ天上の快樂は今此處に、我世の幸は今此刹那にと感じたと五月二十七日の日記の冒頭に誌してある。惟ふに斯の如きは恐らく此日のみに限れる感懷にはあらで夫れ迄に幾度か幾度か繰返して經驗した處であつたらうと想像され

るのである。塵の巷に强いても官能を刺戟し激情を興奮せしめて購ひ得たる歡樂と何たる對照をなすことであらう。

遙かに都の空を望めば前代未聞の怖ろしき事の數々踵を接して起つて居た。理性と自然との名に於て一切の人文價値の轉倒が行はれて居る頃であつた。自由と平等の名に於て人間の有りと有らゆる殘忍と暴虐が許されてある頃であつた。ルイ十六世は斷頭臺に上されて民は共和の萬歲を叫んだ。立憲王黨員と云へば見當り次第捕縛虐殺さるゝも人は當然のことゝして怪まない。其中にはメーヌ・ドゥ・ビランの恩義ある先輩親交の同輩も數多くあつたことであらう。やがて恐怖時代は初まつた。人を殺すこと草も刈るより無雜作に、斷頭機尙手緩しと溺殺銃殺迄も併用された。血に饑えたる惡魔の手は更にひろげられた。マリー・アントアネットを弑して尙飽足らず、サン・ドニーの王室歷代の靈骨に鞭つて人は僅かに甘心した。立憲王黨員は愚か溫和共和黨員も今は自由の敵と目指された。都鄙を通じて投獄せられしもの二十餘萬、其大半は死刑に處せられたといふだけにても當時の有樣は推し測られる。十八世紀佛國啓蒙の哲學者が理想として之が實現に心血を注ぎたりし政治的社會的革命は彼等が冀待せしよりも更に一層轉倒的徹底的に遂行された。

革命を鼓吹し讃美せるの故を以つて革命時代の公認哲學たりし觀念學派の一領袖ドゥ・トラシーさへも楚囚一年有餘に渉つた程の時勢なれば、ドゥ・ビランにして都に留まらんか斷頭臺は彼が不可避の命數であつたことであらう。

與へられたる周圍に對する反應は人それぞれの特質によつて異るものである。彼が友人に送つた手紙の内に『現在の如き世態に於ては私の採用した生活は私に適する唯一の生活であります。世を離れ、恐ろしき人と遠かりて、吾愛する若干の才能を敎養し、不幸なる祖國をかき廻しつゝある擾亂の目擊者とならぬ私は、此孤獨にして人に顧みられぬ生活以外に何も求むる處はないのです』とあるので以て、彼が自らの孤獨隱遁の生活を却つて祝福しつゝあつたことが察せられる。然し狂暴の嵐は此平和なる地方をさへ吹き荒らさうとした。別の手紙の中に『暫らく孤獨閑却の生活を送ることの出來るのを悅んで居たが、此希望も今や失はれかけて參りました。煽動者は我國の隅々迄も擾亂と不和とを行渡らせでは措きませぬ。毒風は隨處に感ぜられます。我地方も之に感染し初めました。斯くては私は何處へも遁るべき場所はありません。唯惱みと死とあるのみであります』とあるので箇中の消息の一端は窺はれる。恐ろしさは親しく目睹する人よりも離れて眺むる人に却つて一層

強く感ぜられることが尠くない。彼が後年議政壇上の人となるに及びて革命的といはず專政的と云はず凡て過激なる政治的傾向に手强く反對し王政復古以來はブルボン王家の忠實なる擁護者たるに至りしこと、單に貴族にして近衞士官たりしと云ふ彼の閲歷の爲めのみではあるまい。惟ふに此時期の實物教訓が彼の政治意見を決定する最も有力なる因素となつたことであらう。

斯樣に革命の狂亂は種々の點に於て吾グラートルーの隱遁者に影響を與へたのであつたが然し夫れが彼にとつて最も痛切剴切なる旨趣を有する點は謂ふ迄もなく此偶像破壞の大旋風によつて外に執着せる彼が內に目醒むるに至つたと云ふ處に存する。惜しいかな這般の消息を窺知する材料が乏しいので臆測による外はないが、常に滿足を他に求めて居つた彼が覺醒の第一日に於て『幸福は財產や地位や權力等外物に存せず』又『激情の興ふる處にも非ず』『夫は內心の平和に發見せられざる可らず』との確信を發表し爾後一世を通じて此信念の渝らざりしもの(勿論思想の進むにつれて其解釋に深さを加へて行つては居るが)豈に有爲轉變諸行無常の教訓の今更の如く身にしみ肝に銘した爲めでは無かつたらうか。覺悟を促す長廣舌は隨時隨處に聞かれるけれど斯うした驚心駭目の事變によつて人は「一切の轉倒」すべき

とを切實に感得する。東西の史乘に散見する事例は之を彼の此場合に當てはめてもさしも不都合はないであらう。（十八世紀啓蒙思想と革命の破壞運動との間に存する一種の必然的關係に至つては此時期の彼には未だ想到しなかつた樣である。）

惡魔內に狂暴を逞くするのみに止らず、墺普聯合軍國境を壓して迫り、內憂外患一時に競ひ來るを見ては、彼と雖も之を雲煙過眼視し我身の安全を祝福するに止まる程冷灰枯木ではあり得なかつた。今ぞ劍を拔いて立つべきの秋と覺悟したこともあつた。然し彼の天分はシャーロット・コルディやナポレオンの夫れとは異つて居た。第一彼の健康が進んで此渦中に投ずることを許さなかつた。

弱きを其性とすと稱せらるゝ婦女子さへ勇敢獰猛の一面を發揮した當代にしては彼の如きは例外とも見るべき程にも纖弱虛弱の人であつた。兩親兄妹五人左迄の歲月を隔てず相次で病歿した處から推しても彼の先天的に薄弱であつたことは察せられる。加ふるに巴里に於ける放逸無慚の生活は左なきだに弱き健康をいやが上にも弱らしたのであらう。日記には風雨陰晴等の氣象の變化が煩はしき迄に精細に記入されてある。元より氣象現象其者に興味を感じた譯ではない。之れが彼の精神狀態に至親至大の影響を及ぼしたからである。彼の心は風の强弱轉向、空

の陰晴乾濕氣壓の高低輕重につれて、或は勇み或は恐れ、或は悅び或は悲み、或は功名心を燃し或は自棄的憂愁に陷つた。寒暖計の變化が卽ち心の動搖であつた。氣象現象のみならず、血液循環の遲速、消化の好惡等の身體的變化が彼の心に明瞭高低を生ぜしめた。外界及肉體の不斷の變化流轉につれて心は境と共に移り須臾も定住する處がない。『實に我ればかり世に變り易きものはあらじ』との彼の嘆息は決して誇張の言ではなかつた。コンディヤックの石像を現實にせば恐らく斯の如き人を得るであらう。且つ記憶も極めて薄弱、部分的間歇的知覺脫失さへあつた。眩暈や熱病的興奮に犯さるることも稀れでは無かつた。夫等にもまして堪え難かりしは自失的恍惚狀態に陷る時であつた。夢とも現ともわかず茫然網然我れ我に非ず、如何に努力するも心少しも集注せず、書を開けば霞に蔽はれたる如く、筆をとれば字體をなさず。我も斯くはあらざりしものをと以前の健全狀態と比較する時、我は此儘永久に恢復せざるに非ずやとの恐怖に襲はるる時『世にも類無き殘酷なる苦痛』la peine la plus cruelle を感じたと告白して居る。彼は此狀態を形容して『調べ妙へに樂器を奏づる音樂家の指が突然硬化し全然之を動かす能はずなりし場合を想像せよ。斯る精神的寂滅よりも積極的苦痛が遙かにましである。其時には猶苦痛を脫せんとの

潑溂たる希願動けばなり』と。マックス・ノルドーの「世紀末病の診斷」には蓋し此日記の如きは絶好無二の札料を提供するものであらう。極度の神經衰弱、此一語に彼の殘る半生の健康狀態は總括されて居る。彼れが哲學的關心の一重心が心身相關問題てふ形をとつてあらはれたりしと、彼にあつては單に理論上の沙汰ではなくて實に焦眉の實際問題でもあつたのである。弱きが故に彼は苦んだ。自己の肉體を呪つた。さはれ祝福は亦此苦痛此呪詛の源たる積弱の健康に發見された。彼にして永く都門の人たらんか、斷頭臺はよし免れても、青雲の志はよし遂げても、自然の報復は彼をして永く此世の人たらしめなかつたであらう。又山野に隱退して居乍ら博覽の士文筆の人たる野望に何時迄も心身を焦したらんには虛名一時に喧傳するともやがては父母兄弟の後を追ふたことであつたらう。然し斯の如きは實は彼にとつては第二義のことである。彼が眞に『自己の虛弱の淨福』felicité de ma faiblesse に感謝したのは之によつて激情の狂亂虛名の執着を擺脫し幻影の奴隷たることから獨立して以つて幸福の精神的平安に存することを覺悟し自我獨立の第一階に上ることが出來たからである。此時より以後彼は屢々己の早くより『よき心理學者』たるを得たるは『弱き生活力』un faible sentment de vie を持てるに依ると語り己れの成功の央を之れ

に歸するに吝さかでなかつた。實に弱きが故に彼は本然の彼に歸つた、自己の天分に目醒めた。

然り迷へる羊は元の牧場に歸らねばならぬ。火宅を出づる車は發見されねばならぬ。『我が幸福は何處にありや』『如何にして我は幸福となり得べきか』之れ彼が眞に切實なる自己衷心の要求に促がされて自づからに向つて發せる第一問であつた。而して又之れ彼が一生の思索生活を規定する指導動機となつた。今や彼を動かしつゝあるものは名聞利欲の對他の執着ではない、宇宙人生の秘義を討ぬる沒關心的研究でも、ない。事はかゝつて吾一身にある。彼が關心の唯一對象は彼自身である。而して彼が一代の沈思潛心の範圍は善き意味に於ても惡き意味に於ても「汝自らを知れ」てふ格言以外には出でなかつた。啓蒙思想の根本的克服、自我哲學の新立證と云ふ點に於て彼と同じ任務を負ふたカントが眞善美の三方面に涉つて其研究を完結し更に進んで最後の絕對價値たる宗教についての批判をなし遂げたのに遲るゝこと一年、惡を意志して善を生むといふ點に於て彼に對してメフィストフェレースの役をつとめたロベスピール誅せられて恐怖時代終りを告ぐるの日に先づ二ヶ月、千七百九十四年五月二十七日を以つて「眞のメーヌ・ドゥ・ビラン」は生れた。

五

生活の眞義は問題の提出と解決の努力との連續進展に存する。彼は自己の幸福問題を提出すると共に彼が眞實の生活に第一歩を踏み出した。然し之れ最も陳腐の問題である。反省の能力を有するものにして古來何人か此問を揭げ之が解答を試みざりしぞ。彼が思想に「新」と「深」とを與ふるものは此問題を解決する方法と其方法を產む彼が特異の體驗とに存せねばならぬ。彼は自問した。我が幸福は何處にありやと。夫が名や富や力や凡て是等の外物に依存せざると餘りに明らかなる現前の眞である。夫は必ずや我が心內の狀態にあらねばならぬ。內心の平和——茲にこそ我が淨福は發見されねばならぬ。然るに此平和たる暫有的には現在すれども我に於ては決して持續することが無い。落日の靜寂に涙ぐむばかりの歡喜を覺え乍ら、一陣の風によつてさへ我が心は忽然として哀傷する。如何にせば彼を確保し此を阻止することが出來るであらうか。之が解答の方途は二あり。我が心の擾亂倦怠空虛の狀態と其能因なるらしく思はるゝ外界及身體の無常流轉とを剩さず殘さず分析し、兩者の間に存する關係を判然と確定すること、之れ第一の方途である。

外的印象の强壓力より獨立し之れに反抗し情海の波瀾を統御支配する力ありと信ぜらるゝ人性の發動的方面、卽ち理知及意志の眞相を明白にし、精神の果して自發性を具するや否や、若し然りとせば夫は果して奈邊迄發動的たり得るやを闡明すること、之れ第二の方途である。約めて言へば我が心の受動能動の兩面に涉つて反省的分析を施し其本性を明晰判然と理解明覺すること、之れが幸福問題に對する唯一の解決方法である。其結果或は我が心の活動の全く外的必然に依憑し、所謂意志の自由なるものの謬想たることを暴露し來るかも知れない。然し我を或時は幸福ならしめ或時は不幸ならしむる原因の奈邊に存するかを認識せんか、尠くとも後者を避け前者を招くことだけは出來るであらう。理解はやがて支配の力となるであらう。或は又我を幸不幸ならしむるものゝ何れも必然不可避にして彼を留め此を避けんとする努力さへも一切徒勞なることが判明し來るかも知れない。然し左る場合にても尠くとも其然る所以を明覺せんか、我等は奴隷であつても欺瞞されて居ない。必然の流轉に引きずられ乍も自覺を以つて之に隨順することは出來るであらう。彼は斯の如き態度と方法とを以つて思索の途に上つた。さらば其結論は如何であつたか。

第二に對しては全然否定的の答案を得た。理性や意志は人間をして動物以上のものならしむる偉大なる部分であるかに考へられて來た。實際或程度迄夫は發動的にしてよく外界印象を支配し情海の波瀾を抑制し得る力あるものゝ如くにも思はれる。然し彼の體驗に對する內省は明らかに夫が一の妄見に過ぎざることを敎へた。一陣の風、息苦しき空氣は今の今迄快活なりし我が心を沈鬱ならしめる。我が理知は明らかに之を認知し前者を是とし後者を非とする。併も一を留め他を退くる力は持たない。意馬心猿の狂ひ、理知は之を非難する。慈悲忍辱の心の動き、理知は之を賞讃する。併も彼を抑へ、之を援くる力は悲しいかな理知は備へない。意志に至つては一層無力である。刹那刹那に變轉し行く意識の流れ、或時は悅び或時は悲み、或時は高く思ひ上り或は卑しき發作に自づからを慚づる。併も仔細に之を檢する時、皆之れ我が意志とは獨立無依なる外的原理に基きて然るを覺知する。わが思想感情行動は我れならざる或者によつて決定せられ、我が意志は寸毫も之を左右することは出來ない。左右し得たりと信ずる時にも詳かに之を究むれば悉く之れ外的能因の所作たるを發見する。會々我心の安定恒常の相を示すことありても、夫は理性乃至意志の力に依れるには非て、外的狀態の均衡を得たるに基くのである

と。彼は斯くして意識の發動性を全然否定する人性論上の決定論に到達したのである。

然らば我が意識の變化進動を決定する外的能因とは何であるか。外界及び自己の身體の有機的狀態より來る印象之れなりと云ふが、彼の第一途より得たる解答であつた。一切の精神活動心意狀態を規定するものは外的感性の樣態と神經系統の變化に外ならぬ。彼はラ・メトリーの學說を想はしむる「機械」Machineてふ語を自己の身體と異語同義に用ゐ、殆んど人性論上の唯物論とも見らるべき言をさへなして居る。曰く『私の經驗によれば、我等の指揮し得ざる我等の身體の狀態卽ち或機械作用が我等の快不快なる時間の總體を規定すること、我等の意見は常に此狀態によつて左右さるること、總括して云へば通俗に幸福の原因と見る處の凡ての感動 les affections は幸福其者と同じく我が有機體制の結果 les effets de l'organisation に外ならずと結論する樣に私は傾く』と。唯彼が之に『私は私の經驗を以つて眞理の證據とは敢て僭しないが』と附言して、定言的斷定を避けて居る處に於て、當時の彼の思索生活に動搖不定の點あることを推知し得るのである。

六

千七百九十四年及五年に渉つての彼の思索生活の發足點は明白なる感覺論であつた。夫の名高き生ける石像の比譬は彼に於て正しく現實の生ける例證を發見した。惟ふに彼の此思想は一には當時の優勝學說たりしコンディヤックの所說に傾倒せる結果なること爭ひ難くはあれど、然し其主要なる憑據が彼自身の健康狀態より得たる彼の體驗に存することを看過してはならぬ。彼の思索の生產進展は他人の學說によつて觸發指導されたことよりも、寧ろ彼自身の內省によつて彼自身の問題及び其解答に到達し、他人の所說は採つて之が補足修正の用に供するに止まつた場合が多い。從つて廣く渉獵して新問題を發見し別種の解決法を認知すると云ふことと稀れである。偉大なる思想家に於ては或程度迄は何れもさうした傾向の存するものではあるけれど、メーヌ・ドゥ・ビランにあつては特にこの傾向が著しい。他人の學說を正當に理解評價しない弊たとへばカントやフィヒテに對しての如き、思索の範圍の狹隘なるの短は、何れも其原因の一半を茲に有する。元より之が爲めに、狹けれども深く、他を理解せずとも自を會得したと云ふ、更に價値ある事業を成遂げたるの

功はある。學說の眞價は却つて之によつて決するものであらう。

さて斯の如き人性觀から曩きの幸福問題に對して如何の結論が牽出されるであらうか。幸福は內心の平和にある。內心の平和は感性感覺の中庸適度を得ることによつて將來される。されば出來得る限りの程度に於て過激極端なる感覺的刺戟より遠かり中庸適度の夫れを招致すること、之れが幸福に到る唯一の途である。たとひ理知や意志は外的必然によつて決定され左樣なる遠離招致の力無しとするも、尠くとも其必然を洞見し進んで之れに甘從することは可能である。安心は窮極「諦め」resignationによつて獲られる。(これが徹底せる感覺論の齊合的歸結なるかは別問題である)。

約言すれば彼は所謂「精神的革命」によつて實踐的感覺主義より理論的感覺主義へ、アリスティッポス風の刹那的快樂主義よりエピクーロス風の常住的快樂主義へと移つて行つた。併も其根抵の依然たる感覺論にあることは云ふ迄もない。ナヴィル氏が『彼の感覺論への粘着は顯然且つ完全である』と評したのは至極の言である。

然し彼は當時と雖ども、此決定論的感覺說を以つて全然滿足して居た譯ではなかつた。彼の心の何處にか强く之れに反抗するものがあつた。一切の精神活動は物

的機械作用の規定と主張し乍ら他面又思惟存在は單純不可分割にして機械的說明を許さずと說き意志の全然外的印象によつて決定せらるゝことを力說し乍らホップス、エルゼシュスの徹底的決定論に恐怖を感じ心胸の要求衷心の希願の名に於て意志の自由を擁護せんと試みた。此點より云へば理知と心胸との二律背反が彼の思想中に存在して居たと見ることが出來る。然し後者は底下流であつて其聲の極めて微弱であつたことを否むことは出來ない。心胸の要求が理知の是正立證を經て表上流となれる時が彼の思想の獨立期であつた。而して又佛國啓蒙思潮の克服期であつた。

七

今如上の所說に就て後の思想に進展する契機と見るべきものを探れば、大凡そ三つを擧げ得ると思ふ。

第一は精神の發動作用を研究するに當つて就中意思に着眼したことである。結論は意志の否定に終つては居るけれども、若し我等の意識に發動的なる方面ありとすれば其重點は意志作用に置かるべきに想到し、次の如き注意すべき言葉を發して

居る。『自己省察に馴れたる人がコンディヤックが理解力を分析した如くに意志作用を分析せんことは大に望ましきことであらう』と。意志の自由活動に於て自我の本性實在の眞相を觀ずるに至る傾向は夙に此句の中に胚胎して居ると見ることが出來る。

第二は理知を意志と分離し之を第二義的に見ずして其發動性と云ふ點に於て尠くとも意志と對等の價値を認めたる點である。後彼が理知の本領の『働く』と云ふ處にあることを洞見して之を意思の自由活動と相卽する見解に進むことが此中に暗示されてあると考へてもよいであらう。

第三は意識の發動的方面と受動的方面との關係問題を心身相關の問題と密接に結附けて考察し彼が重要なる關心の的としたことである。意識の此二面の關係を內面的純粹經驗彼の語にて云はゞ『意識の根源的事實』の進動發展の基本要素と見、茲に心身相關の難問を解決する關鑰を發見し來らんとする方向は既に豫示されてあると云つても不可なかるべしと信ずる。

＊　＊　＊　＊　＊

問題は提出された。解答の方針は定まつた。知らず彼が溯源的求心的內省は何

時迄彼を感覺主義に留まらしむるであらうか。「外に向ふ多數の人」の後を追はず「內に集注する少數者」の途を撰べる彼が發見し來る處のものはそも何であらう。

附記　本稿の材料に就て

〔甲〕彼の傳記の材料（本文自一至四）

(1) 彼の生活を描寫するに當つて用ゐた材料中最も重なのは謂ふ迄も無く Ernest Naville, Maine de Biran. Sa vie et ses pensées 1857. 3 ed 1874 である。ナヴィル氏はメーヌ・ドゥ・ビランを初めて學界に紹介したる人と云ふも敢て不當ならざる程に彼に對して重大密接なる關係ある人である。メーヌ・ドゥ・ビランの著作は大小併せて五十篇以上にも上るが、生時出版されしは僅に三篇に止り、爾餘は凡て遺稿として筐底に秘せられてあつた。クザンは既刊遺稿合計二十三篇を Oeuvres philosophique de Maine de Biran 4 Tom. 1334. 1841 として公にしたが、是等は彼の思想を斷片的部分的に發表せる小著作のみにして、彼が一生の心血を注いだ大作（量に於ても質に於ても）は全然等閑に附せられてあつた。されば彼の學說の全體は、嫡子 Felix Maine de Biran に遺稿一切を委託せられてより之れが整理研究に十有二年の歲月を費したナヴィル氏の Oeuvves inedits de Maine de Biran 3 Tom. 1859 によつて初めて世に知らるゝに至つたのである。曩に揭げたる『メーヌ・ドゥ・ビラン——彼の生涯と彼の思想』は出版に於ては『未刊遺稿』に先立てども實質は其整理研究の副產物と見るべきものである。今私の所有する修正增補第三版本に就て其概要を語つて見よう。

此書は三部から成立して居る。第一部 Vie de Maine de Biran pp. 1—105 はナヴィル氏の筆に

なり、彼の傳記中最も詳密なものである。彼の外面史世間的活動史に就ての報告は之を以つて典據とする。其中には主題の人と比較的無關係な部分(たとへば著者の革命に對する意見)や又あらずもがなと思はるゝ長々しき辯護論難(宗教についての部)もあるが、中には又他に發見されない彼の書翰や當然本書第二部に收めらるべくして收錄せられざる感想錄の拔萃を含み、彼の內面史の材料としても見逃し得ざるものゝ一つである。

第二部 Pensées de Maine de Biran pp. 101—387 は、千七百九十四年五月二十七日に初まり千八百二十四年五月十七日に終る千二百頁に餘る彼の日記に就て、編者が一定の方針の下に取捨撰擇を施して出來上つたものである。(尤も此中、千八百十一年度の日附未詳の數頁の記事を除けば、千七百九十六年より千八百十三年迄約八年間の記事は、彼自身が書留めなかつたのか又しは散逸したのか理由は分らぬが、尤も角缺除して居る)。ナヴィルの告ぐる處によれば、其內容は極めて多端に涉り、政治上の議論や日常生活の煩瑣なる記事もあれば、彼の哲學思想の新なる出產進展の道行や心靈上の機微なる變轉推移の過程を事細やかに誌した部分もある。而して其書方が又甚だ不規則にして、日々怠りなく誌してあるかと思へば幾週も幾箇月も空虛な處もあり或は殆んど誌すに値しない尋常茶飯事の綿密丁寧に書留めてあるかと思へば立派な學術的性質を帶びたる內省錄もある。編者が此浩瀚にして多種多樣なる遺稿に就て『著者の內面生活の進動を明らかにし、讀者をして著者の個人的經驗の內に其哲學說及宗教思想の始源を認知せしむること、一言にして云へば此異常に眞摯なる精神の辿れる發展の道行を復寫する』ことを目的として撰取排列したる結果出來上つたのが卽ち此『メーヌ・ドゥ・ビランの

思想』と題する部分なのである。風の吹きかひ雲のたゝずまひにさへ心を痛ましめ思を惱ます程にも果敢なくか弱く生れ附きし彼が、惑ひや悶えや苦みの數々、疑ひ討ね信ぜんとする足掻きの迹、讀み以て行く内に、時處の隔たり彼我の別を徹して其處に知慧の木の實に永遠の墮落を買へる人の子の久遠の惱み――而して又無限の救ひを感得味識することが出來た心地がする。彼は大悟徹底せる哲人でも無ければ、道德堅固の聖人でもない、又世の所謂天才でもない。一生迷ふた人である、もがいた人である、極めて平凡な人である。此點に於て私共には甚だ近かしい親しみ易い人である。兎も角私にとつては近來會心の書であつた。私は主に此日記を材料として一凡人としての彼の内面史を描かうと試みた。此部分は彼地にても識者の注意を惹けりと覺えて、此書出版の翌年早くも之れのみを研究題目とせる一册の書さへ出版された。Auguste Nicolas, Etude sur Maine de Biran d'après le journal intime de ses pensées 1858 該著者の目的は此告白にあらはれたるメ氏の宗教觀のカトリック教と必ずしも矛盾するものに非ざることを證明するにあるらしい。(Alfred Kühlmann, Maine de Biran. Ein Beitrag zur Geschichte der Metaphysik und der Psychologie des Willens 1901. S. 138 參照)。斯うした試みはナヴィル氏によつても入念になされて居る。E. Naville Maire de Biran pp. 72—103. Oeuvres inedits de M. d. B. Tom I. Introduction de l'éditeur pp. CXXII—CCXV. 是等の人達にあつては當然の骨折でもあらうが、私共の眼から見れば隨分無理が多い樣に思はれる。猶此點に就ては、彼の主意主義から神秘主義への推移を述べる際に論及することとしよう。

第三部は Lettres de Maine de Biran à ses filles pp. 385—459 と題し Adine, Elizn の二兒に宛てたる三十二通の手紙が收めてある。子を愛ふ親の慈愛に涙ぐまるるばかりの手紙である。

自己沈潛の此思想家は家庭に對して冷淡であつたと評したCaro氏の如き謬見を抱く人に對しては蓋し最も有益な部分であらう。第一版には此部を缺ぐ代りに、卷頭にHistoire des manuscrits inedits de Maine de Biran が載せてある。之れよりも更に詳細な記事が Oeuvres insdits. Tom I. Introdnction de l'éditeur に出た後には不用となつたので第二版に至つて省略に附したのである。

(2) 僅少てばあるが、彼の哲學的著作中に彼の思索期以前の感想經驗を誌した部分がある（たとへば Oenvres in edits Tom. I. pp. 127—129 Tom. III p. 335 の如き）。

(3) Conailhac Maine deBiran, 1905 chap. II. は主として(1)によつたものであるけれど、中には他に發見されぬ新事實も多少含まれて居る。

(4) 尙彼の生存時が正しく佛國大革命期に當り、之れと絕えず直接間接の關係に立つて居る處からして、革命についての多少の叙述を惜むことが出來ない。此點に就ては Historian's History of the World. Vol. XII に負ふ處多きことを斷つて置く。

〔乙〕彼の學說

（本文自五至七）の叙述は主としてナヴィルの編修せる彼の千七百九十四年及五年の日記により傍ら同氏の物せる傳記及『未刊遺稿』への『序論』に處々引用せる彼の感想錄によつた。

前號『メーヌ・ドゥ・ビランの出づる迄』正誤

頁	行	誤	正
三	二	事務	事象。

〃	九	題正	反正
六	十五	普汎妥當の認證	認識の普汎妥當性
七	三	怪しむる	怪しむ
九	一	なとり	なりと
〃	三—五	ガッサンディの……與へた	デモクリトス、エピクーロスを復活せるガッサンディ（1592—1655）の原子論的自然觀が時を隔てて此時代の自然主義者に勸からぬ援助を與へたと云ふ事情もあるし、又諸國に當時著しく發達した生理學によつて施された生命現象の機械的說明が當時の佛國學者によつて巧に利用されたと云ふ事情もあつた。
十	十三	ふて	て、ふ
十三	七	感じる	感ずる
十四	三	のみに	のみにて
〃	七	如く	如き
〃	十	論現的	論理的
〃	十三	ディデロー、ラ・メトリー	ラ・メトリー、ディデロー
十五	五	如且	如く且
十六	五	ないことは	ないと
十九	二—三	「感覺論」や「論理學」にては……	「感覺論」にては……「論理學」や遺稿として
		遺稿として	
二十	十三	論」者	學派」